

設楽発掘通信

No.16
平成27年
12月号

地元説明会にご来場

ありがとうございました。

さる十一月七日(土)・二十一日(土)に地元説明会を開催しましたところ、滝瀬遺跡(八橋所在)では四十名、今年二回目の笹平遺跡(小松所在)には百十名もの方々がお越し下さいました。みなさま、ありがとうございました。

滝瀬遺跡では、縄文時代早期から前期の集石炉跡七基を中心に、中期から後期の竪穴建物跡、後期の袋状土坑などをご紹介します。このうち「集石炉」には興味をもたれる方も多く、用途をはじめ様々な質問やご感想をいただきました。

また県内では稀な集落全面調査となった笹平遺跡では、縄文時代中期と後期の竪穴建物跡(十六棟以上)などを、中央の大岩を横目に見ながら順路に沿ってゆっくりと見学していただくことができました。遺跡を代表する資料となった岩偶岩版類・大型石棒や、土偶などへの関心は高く、やはり様々な想像を掻き立てる造形であるようです。

さて、今年度の調査もいよいよ終盤を迎えています。これまでの成果をもとに設楽町の縄文時代のくらしについてご報告できるよう準備しております。どうぞご期待ください。

(愛知県埋蔵文化財センター 武部真木)



写真1 滝瀬遺跡 説明会の様子

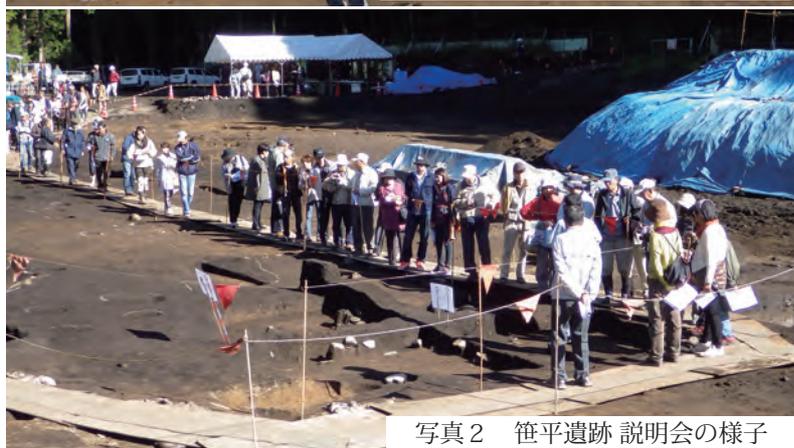


写真2 笹平遺跡 説明会の様子

※地元説明会資料は、愛知県埋蔵文化財センターのホームページからダウンロードできます。また、昨年度から刊行しています「設楽発掘通信」についても、すべての号数をダウンロードして頂くことができます。その他、各種イベントのご案内も随時行っております。アドレスは四頁目の奥付に記してありますので、是非一度、ホームページをご覧ください。

滝瀬遺跡の発掘調査

滝瀬遺跡は十一月二十四日をもってすべての調査が完了しました。現在は、調査区埋め戻しと遺物洗浄を行っています。遺物の洗浄が完了し時期等が判明し次第、出土遺物の成果をご報告します。今月は現地調査で見つかった縄文時代早期〜前期（今から六千年前以前）の集石炉についてご紹介します。写真3・4のように火の影響を受けて赤みがかった礫が多数見つかりました。これらは遺構内に入れられた石ではなく、元々その場にあった自然の礫を利用していたと考えられます。写真5の石はタールが付着しているものですが、タールとは、有機質が熱せられたときに発生する粘り気のある黒色〜茶色の液体です。同じ遺構内からは炭も多く見つかったため、炉として利用していた可能性があります。写真6〜8は、様々なタイプの集石炉の断面です。6は黄色のラインの上の石の密度が低く、下が高くなっており、石の密度が著しく違います。掘り起こしたり、作りかえたり、何らかの形で当時の人々が手を加えたものではないかと考えられます。7は黄色のラインより上の石の密度が高くなっており、6とは逆の様相を示しています。8は前の二つとは異なり石の密度が均等であるため、遺構と同時に石を入れ込んだように考えられます。写真9は完掘した状態です。皆さんは、どのような想像ができましたか。周りの方と討論、意見の交換をしていただければ幸いです。

（株式会社二友組 杉山敬亮）



写真3 被熱礫①



写真4 被熱礫②



写真5 被熱礫③



写真6 集石炉断面①



写真7 石炉断面②



写真8 集石炉断面③



写真9 調査完了状況

笹平遺跡の発掘調査

六月から継続してきた笹平遺跡の発掘調査も、調査が遺跡全域におよび、残すは埋め戻し作業のみと終了が近づいてきました。調査成果の詳細な報告は次号で改めて行う予定ですが、今回はその一端をご紹介します。去る地元説明会での目玉とでも言うべき遺物の一つが土偶でした。土偶とは粘土を焼成してつくった人形で、一般的に女性、特に妊婦を表現しているものが多いと言われ、今回出土したのも女性を表現したものと思われれます。写真10が出土した土偶ですが、頭部・両腕・下半身が欠損しています。全国的にも出土例のほとんどが「壊された」状態で、完全な形で出土する例はほんのわずかだそう。当時の人々にとって、土偶を破壊することに重要な意味があったのだからと考えられています。

土偶は、以前にも紹介しました石棒（写真11）とともに、縄文時代に特徴的な祭祀や呪術にかかわる遺物の典型とされています。その他の特殊遺物も含め、多くの呪術具が出土したことは大変貴重な発見と言えるでしょう。また、これらの遺物を考える時、縄文時代の人々の社会・思想・精神といった枠組みで語られますが、まだまだ不明な点も多く、興味の尽きない分野と言えるのではないのでしょうか。

（株式会社二友組 鷺坂有吾）



写真10 土偶出土状況 (左下が頭部)



写真11 大型石棒出土状況

大名倉丸山遺跡の発掘調査

大名倉丸山遺跡の調査は十月十三日から始まり、十一月十日をもって終了しました。今回の調査は約四百五十mほどの狭い範囲で行ったので、短い調査期間となりました。

大名倉丸山遺跡は豊川上流の左岸に位置し、調査区の南で二本の川が合流しています。明治十七年の地籍図には調査区東側を通る道が記されていますが、現在でもその痕跡が残っています。また、調査区付近には「用材山」と記してあります。その後は、石垣が築かれ耕作地等として利用されたのち植林が行われたと考えられます。

調査の成果としては、鉄滓が数点出土しました。鉄滓とは、鍛冶や製鉄の際に出る不純物の塊のことです。今回の調査では周囲に関連する遺構は見つかりませんでした。また、近辺で鍛冶が行われたかもしれません。

また、調査区南部には大量の巨礫が見られました（写真12）。これ自体は自然の堆積と考えられますが、一部の礫には人の手によって割られたような痕跡が見られました。また、礫の間から鑿のようなものも見つかりました。もしかしたら、石垣を作る際の石切り場だったのかもしれない。

今年度の設楽町での調査も残りわずかとなりました。調査は終盤をむかえています。最後まで貴重な発見が続いていきます。今後の調査報告もご期待ください。

（株式会社二友組 岩瀬大輔）



写真12 空中写真撮影 (右が北)

縄文時代の石鏃について

縄文時代の石鏃^{せきざく}は、材料の元となる石（母岩）から薄く剥がした石片（剝片^{はくへん}）を打ち欠いて加工を加える、打製石鏃^{うちせいせきざく}が中心です。石鏃は、矢の先端の突き刺さる部分に当たります。矢柄^{やがら}に装着する際には、凹ませた鏃の基部へ矢柄の先端を挟み付ける場合と、鏃の基部に茎^{くき}を作り出して、その部分を矢柄の先端に差し込む場合に、大きく二つの方法があります。石鏃の場合、無茎鏃^{むけいざく}といわれる茎のないものが前者に、茎のある有茎鏃^{ゆうけいざく}といわれるものが後者に該当します。縄文時代を通じては無茎鏃が多く、東海地域では有茎鏃は縄文時代晩期（今から約三千二百年前）以降に次第に増えてきます。

全面を磨いて仕上げる磨製石鏃^{まぜいせきざく}は、弥生時代中期後葉（今から約二千年前）頃に出現します。ところが、縄文時代においても、草創期以降、器面の一部のみが研磨される、局部磨製石鏃^{きょくぶまぜいせきざく}と部分磨製石鏃^{ぶぶんまぜいせきざく}とかわれる、打製石鏃の存在が知られています。かつては、縄文時代早期（今から約九千年前頃）に特徴的なものとされてきましたが、近年の研究により、縄文時代後晩期（今から約四千年前以降）にも多く存在することが明らかとなりました。

図1は設楽町内の事例で、縄文時代後晩期に属するものと考えられます。いずれも身の中心部から凹んだ基部にかけて研磨されています。

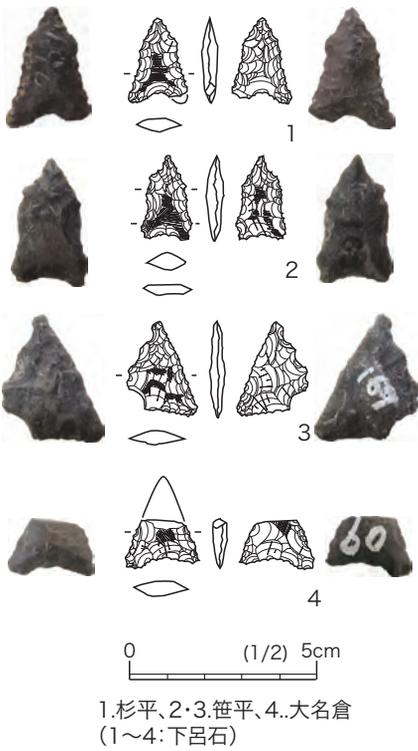


図1 設楽地域の部分磨製石鏃
（奥三河郷土館蔵）
※トーン部分が研磨の範囲



写真13 大名倉遺跡出土
有茎鏃（奥三河郷土館蔵）
※下の凸部分が茎部

ます。使用されている石材は、下呂石^{げろいし}とも呼ばれる流紋岩^{りゅうもんがん}の仲間です。この時期に石鏃を中心に多用されています。

縄文時代晩期になると、東北地域から関西地域にかけて、根挟み^{ねぼさ}といわれる石鏃を装着する鹿角製の器具が出現します。東海地域では、貝塚から多量に出土しており、内陸部も含めて普通に用いられていたようです。

研磨の目的は、矢柄への安定した装着を行うためです。石鏃製作時に中央に瘤^{こぶ}のような盛り上がりが出てしまうこともあり、それを研磨で除去するようにもなりました。

なお、根挟みのある矢は、民族事例などから、毒矢であったとも考えられています。（愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁^{かわぞえかずあき}）

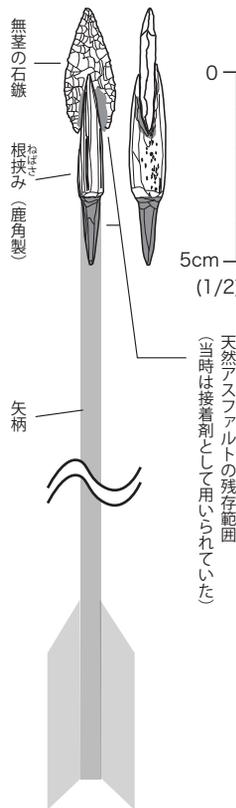


図2 宮城県中沢目貝塚
出土石鏃装着の根挟み
（東北大学考古学研究室蔵）



設楽発掘通信

No.16 平成27年12月号

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県富田市新ヶ須町野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力 株式会社二友組